

吉田隆絵画展

世界がありすぎる

Takashi Yoshida

漫画と絵画の向こう側

時空を超えて笑いと哀しみを描いてきた漫画。
存在の不思議を見つめてきた絵画。
それぞれの方法で問い続けてきたもの。
同じ長崎の地で、
異なる表現の二つの風景が静かに交わる。

2026年
8月19日(水)～25日(火)

8:15～21:30 入場無料

長崎市役所
19階ギャラリーウォール

岡野雄一漫画展

初めてのヒーロー

あちらとこちら

Yuichi Okano

岡野雄一・吉田隆トークライブ

[漫画と絵画の向こう側とは] [進行] 佐々木 亮 (ライター)

8月23日(日) 14:00～15:30 入場無料

長崎市役所2階 多目的スペース

[FM長崎]のラジオ番組にゲスト出演

Kool School,
Music Bar AGE & KeiCo

7月23日(木) 21:00～21:55 ON AIR



ペコロス・アニキの珍来ラジオ[ミナキクヨロシ] 76.7MHz
長崎市民FM放送 毎週火曜日 20:30～21:00 生放送とツイキャスで絶賛配信中!

主催: 珍来ラジオ20周年突入イヤーイベント実行委員会

後援: 長崎市民エフエム放送、長崎市、長崎新聞社



WEBSITE



TWICAS

見慣れた風景を見ていると、ときどき足元が揺らぐような感覚があります。世界はなぜ存在しているのか。なぜ私はここにいるのか。そんな答えのない問いが、私の制作の出発点です。作品の中で目指しているのは、何かを説明することではありません。私たちが当たり前だと思っている世界をいったん手放し、その存在をあらためて見つめ直すための時間をつくることです。見ることと考えることのあいだにあるわずかな揺らぎの中で、世界と出会い直すための作品を制作しています。

吉田 隆



『記憶と錯視』 2024年 デジタルプリント
アートオリンピア2024



『追憶のメタモルフォーゼ』 2025年 ミクストメディア
第4回札幌国際芸術展

吉田 隆 ●Takashi Yoshida

- 1958 長崎市生まれ
 - 1982 国立佐賀大学 教育学部特設美術科卒業
 - 1982 現代日本絵画展(宇部絵画ビエンナーレ)入選(宇部市)
 - 1983 国立佐賀大学 教育学部美術専攻科 油絵専攻修了
 - 2005 「読売写真大賞」デジタル写真部門1席(全国巡回展)
 - 2007 「エスクワイアジャパン デジタルフォトアワード」アマナ賞受賞(東京)
 - 2008 KTN ギャラリー(長崎市)にて個展
 - 2014 「第1回住友不動産販売STEPフォトコンテスト」佳作(東京)
 - 2014 「AOMORIプリントトリエンナーレ2014」入選(青森市)
 - 2014 「第3回 FEI PRINT AWARD」入選(横浜市)
 - 2015 田川市美術館大賞「英展」選定(福岡県田川市)
 - 2017 第2回堂島リバーアワード2017 グランプリ受賞(大阪市)
 - 2018 イタリア フィレンツェ留学
 - 2018 堂島リバーフォーラム(大阪市)にて個展
 - 2024 アートオリンピア2024 入賞・特別入賞
 - 2025 第4回札幌国際芸術展 入選
- 現在、佐世保市在住。デザインスタジオ ヨンエフ代表。
長崎県立長崎商業高校・長崎県立松浦高校の美術科非常勤講師。



WEBSITE



NOTE

漫画と絵画の向こう側

単行本「ペコロスの母に会いに行く」とはまた違った、自費出版にしか載っていないレア？な初期作品。単行本以降の作品。そして書き下ろし。どれも、長崎で生まれ育ち、長崎を20年離れた後にUターンしてから老いていく経験を元に描いてきたモノです。これらは過去と現在、彼岸と此岸、他人と自分、記憶と現実……いろいろな「あちらとこちら」が行き交う人生がこの漫画の向こうにあるような気がします。とはいえ、ふと気づくと父母の掌の上に居る、というのを実感する昨今。ぜひご覧ください。

岡野雄一



岡野雄一 ●Yuichi Okano

1950年、長崎市生まれ。認知症となった母・みつえさんとの日常を描いたコミックエッセイ『ペコロスの母に会いに行く』を自費出版。その後2012年に商業出版され、口コミやSNSを通じて全国的な反響を呼んだ。認知症介護という重いテーマを扱いながらも、ユーモアと温かなまなざしに満ちた作品世界が高く評価され、第42回日本漫画家協会賞優秀賞を受賞。累計20万部を超えるベストセラーとなった。『ペコロスの母に会いに行く』はNHKでドラマ化され、2013年には映画化。監督は森崎東。映画は大きな反響を呼び、第87回キネマ旬報ベスト・テン日本映画第1位を獲得した。

代表作に『ペコロスの母に会いに行く』『続・ペコロスの母に会いに行く』『みつえばあちゃんとボク』『ペコロスの母の玉手箱』『ペコロスの母の贈り物』『ペコロスの母の忘れもの』など。岡野作品の特徴は、老い、認知症、介護、家族といったテーマを、悲壮感だけで描くのではなく、笑いと哀しみが同時に存在する人間の営みとして描き出している点にある。認知症を「失われていくもの」としてだけではなく、「人生の別の時間」として見つめるその視線は、多くの読者の共感を集めている。

現在、長崎を拠点に活動を続けながら、漫画家としてだけでなく講演活動や音楽活動も行い、人と人との関わりや記憶、老いと生をテーマに発信を続けている。



あちらとこちら

世界がありすぎる